
ドラゴンのいる村

丹羽凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンのいる村

【Nコード】

N1345T

【作者名】

丹羽凜

【あらすじ】

タイトル通りのはなしです

この村にはドラゴンがいる。いつからいるのかわからないが、それは僕が生まれるずっと前から住んでいる。年に数回村の上空を飛んでいく。馬鹿でかいその体で村全体に影を落とし、そのスピードからできる突風はいくつかの家屋根を吹き飛ばす。別に死人が出るわけではない。この村はそれ以外安全なのである。山賊も出なければ、近隣の村からの襲撃もない。つまり、ドラゴンに近づく愚かものはいないのである。皆が言う、それは守り神だって。そして陰では死神だと。

死神と呼ばれる所以は、この村に今でも続くしきたりにある。それが、生贄だ。もちろん表立ってではない。年に一度、村で選ばれた一人が勇者としてドラゴンのところまで出向き、討伐するつてのが建前としてだ。勇者として選ばれるのは15歳以上のすべての住民で、男も女も関係ない。もちろん、勇者として出て行った人たちが今まで帰ってきたことはない。聞くところによると、昔一度だけ青年たちがボイコットをしたことがあったらしい。ただその結果は凄惨たるもので、一層生贄の必要性が深まっただけらしい。

そして花も咲き始めた春に、僕は村長に呼び出された。村長という言葉には、どこことなくおじいさんを浮かべてしまう力がある。しかしこの村の村長は、余りにも若い28歳である。そして、女性だ。「来ましたね……」

メイ村長が僕の顔を見ながら言う。その声はきれいな高音を僕の耳に届かせるも、どこことなく重い。僕は分かっていた。これから何が言われるのか、そしてこれからどうなるのかも。僕はただ彼女の顔を見たまま黙っている。メイ村長は口を開く。

「あなたが今年の勇者として選ばれました」

同時に僕は深い絶望をあじわう。わかっていてもそれは襲ってくるのだ。言いようのない恐怖が僕の決意を鈍らせる。

（決めたはずだ。どんなことも受け入れるって）

心の中で反芻する。次第に落ち着きを取り戻し僕は答える。

「はい」

それが精一杯の受け答えだった。

「つぎの村長は誰にしますか」

淡々とした事務的な質問口調で言う。メイ村長もつらいのだ。

この村の村長は住民の意思で決まるのではない。勇者に選ばれた人間が決められるのだ。村長は来年だけ勇者としては選ばれない。つまり、一年だけでも安心して暮らせるのだ。ただ、その代償として選ばれた人に勇者を伝えなくてはいけない。メイ村長は去年の勇者ジャックが選んだことになる。ジャックとメイは夫婦だったが、村の決定は変わることにはなかった。そして、ジャック自身の決意も変わることはなかった。旅立つ前に僕が聞いたら、子供のころにポイコットの惨劇にあったらしい。だから、ジャックは逃げなかった。あんなことは二度と見たくないと言って。

僕は考えながらも、次の村長が誰がいいのかなんて思いつかなかった。妹のエリーはまだ13歳で勇者には選ばれない。母親も父親もいない僕にとって誰がいいのかなんて思いつかなかった。

「メイさん。あなたが続けてください」

僕はそういった。それは彼女にとって残酷なことかもしれない。夫を亡くし、さらに勇者任命の儀式をもう一度押しつけてしまうのだから。

「そうですか。わかりました」

「そして、エリーを守ってください」

「はい……」

これで僕の勇者任命の儀式は終わった。

村長から剣と食糧をもらい、僕はいったん家に戻る。妹のエリーに別れを告げるためだ。だが、家の前まで着くと僕はドアを開けようとする手を止めた。いったいどんな声をかけるべきなのだろう。さよならといったって何になるわけでもない。ドラゴンを倒してく

るといったところで、それは死んでくると同義でしかない。ならば、僕がいえることは何もないのだろう。そう思うって、僕はドアから手を放した。

「お兄ちゃん？」

ドアの中からエリーの声が聞こえる。少しばかり震えているような声で。僕は迷う。ここで逃げ出すこともできる。いつか僕の死を知るならそれは後でいい。死にいくの伝えるのはただの暴力でしかなく、心に傷を負わせるだけだ。だが僕は動かなかった。踵を返しかけた足を元に戻す。

「どうした、エリー」

その言葉と同時にドアが開く。目の周りが真っ赤になったエリーが出てくる。

「お兄ちゃん……」

その言葉しか出なかったようだ。僕の懷に飛び込ん来て、すぐに泣き出した。エリーは、すでに知っていたようだ。僕は何も言わず頭をなでてやる。それしかできない。かけてやれる言葉もない。ただ、心の中でごめんねとつぶやく。もし言ってしまうえばそれは妹を悲しみを増やすだけだから。僕はただ妹が泣き止むのを待った。

しばらくすると妹は僕の腕の中で寝息を立てていた。顔をくしゃくしゃにしたままで。僕は妹をベットに寝かしつけた。

「さよなら、いつてくるよ」

ぼくは町を出てひたすら北へと向かう。半日から一日かかるらしいが詳しくはよくからない。ただ、こっちからドラゴンが飛んでくることだけがわかってる。もしかすると、もっと時間はかかるかもしれないが、僕はひたすら歩き続ける。初めはある程度舗装された道だったが、2時間もしないうちにけもの道へと変わった。それだけのことで歩くスピードは格段と遅くなった。さらに、背中にしよった剣の重さもつらくなってくる。僕は水筒からなまぬるい水を飲み、地面に座る。

「ほんとに、あってんのかな」

僕は不安を口に出しつつ、もらった干し肉をかじる。保存食独特のまずさがある。僕はそれを水筒の水でながしこむ。颯爽とした木の隙間から空を眺める。すでに日は落ちてきている。あと数時間したら、何も見えなくなる。ぼくは慌てて出発をする。

「とりあえず、今夜寝られる場所を探さない」と

それから一時間以上歩いても、寝るのに適した場所は見つからず僕は途方に暮れていた。歩けど歩けど変わらぬ風景が、さらに僕を陰鬱とした気分させる。

「誰かー」

僕はむなしくなって声を上げる。もちろんこんな森の中に人がいるわけもない。僕は寝場所を探しながら歩き続けた。

「こっちだー」

突然森の奥から声が聞こえる。ほとんど真っ暗の状態で、頼れるのは月明かりしかない状態では、だらがいるのかはわからない。僕は不振に思いつながらも、一種の確信があった。この声はジャックだ。生きていたのだろうか？僕はとりあえず、声に向かって歩く。

「誰かいるんだろ」

また声が聞こえる。声はさっきよりも近くなっている。僕は歩みを早める。月に雲がかかりあたりは暗くなる。闇が世界を覆う。僕は手探り状態で前へ前へとすすんだ。

息遣いが聞こえる。ヒトのではない。それは動物のものでありながら、犬や猫といった大きさの動物ではだせないような唸りを含んでいる。

雲が晴れる。同時に月の光が一面を照らす。僕の目の前にそれはいた。黒々としたその皮がやけに威圧感を放ち、目の前にある牙は黄色く変色しながらも、その鋭さだけは凶悪さを保ち続けている。そこにドラゴンはいた。ただ、運がいいことにドラゴンは寝ていた。その体を小さく丸め、羽をたたみ、しっぽだけが一定間隔で動いている。チャンスだ。僕はそう思う。ドラゴンの首は目の前にある。僕は背中から剣を取り出す。これは、きっとジャックが導いてくれ

たんだ。僕は足音を立てないようにゆっくりとその首へ近づく。ドラゴンが寝息を立てる。その寝息だけで目の前の木がしなる。あつけにとられる。チャンスだとしても気は抜けない。息を殺し首まで近づいた。僕は剣を高く上げる。そしてそれを思いっきり振り下ろした。

しかし、僕の恐怖がその行動を阻止する。振り下ろすだけの手を硬直させる。剣では傷をつけることすらできないのではないか。そんな疑問が浮かび上がってくる。いままで、何人も勇者としてここに来たはずだ。その中にはドラゴンが寝ている間に来た人もいるはずだ。なのにこのドラゴンには傷一つない。僕は最悪のシナリオが目に見えかぶ。さすがに目の前に死が待ち受けていると知って、行動できるわけもない。僕は剣をおろし、後ろに下がる。

「ふざけるな」

ジャックの声が聞こえる。僕はあたりを見回すが誰もいない。

「ここまできて逃げるのか」

その声は確実にドラゴンから聞こえる。幻聴ではない。僕は声を出す。

「ジャックなんだろう」

返事はない。同時にドラゴンの首がゆっくり上がりだす。僕の声で起きたのかもしれない。

「ジャックなのか」

ドラゴンに投げかける。

「早く殺せ」

かえってきた言葉はあまりに乱暴だった。だが、すでに僕は剣を構える勇氣などなかった。

「なんでだよ、せっかくここまでしてやったのに」

ドラゴンがしゃべる。それは低く唸りに近かった。

「ドラゴンがしゃべった？」

僕は驚いて、剣を落とす。

「そうだ、俺はジャックだ。メイは元気か」

突然の変わりように戸惑う。

「ええ、まあ病気とかはしてないですけど……」

「ならよかった。思い残すことはない。早く俺を殺して楽にしてくれ」

「ちょっと待ってください。どうしてジャックがドラゴンに」

「お前が誰だか知らんが、さっさと殺してくれ。でないと殺しちゃう」

「誰だ知らないって、同じ村の……」

「早くしてくれ。俺は人の心のまま死にたいんだ。人を殺したくはないんだ」

「理由もなしにあなたを殺せはしません」

その言葉で観念したらしい。

「なら、聞いたら何が何でも殺せよ」

そう言っ、何があつたのかを語りだした。

「同じだよ。今のお前と全く」

「同じ？」

「そうだ。俺はドラゴンが寝ている隙について殺した」

「殺した？ならどうして」

「このドラゴンの正体は、からっぽだ」

「からっぽ？」

「そう、ただ生に執着し続ける屍みたいなもんだ。そいつを殺そうとすると、自分が殺される」

「殺される？ドラゴンに？」

「魂を食われるといったほうが正しいのかもな。気付けば俺はドラゴンになっていた。まさに殺そうとしていたはずのドラゴンにな」
僕はあっけにとられる。その話があまりにも信じられなくて。

「そして、空腹感が俺を襲った。当然食糧は目の前に横たわっているわけだ。俺の体がな。最初は拒否したさ。だが気付けば俺の体はきれいさっぱりなくなっていた。空腹感とともに……」

言葉が出ない。なんといってもいいかわからない。

「時がたてば孤独が俺を襲ってきた。一人でいることがこんなにつらいことだとは思はなかった。村にも何回か飛んだことがある。最初は懐かしい思いしかなかった。だが次第に、人がわからなくなってきた。もはや食糧としか目に入らなくなってしまった。シカやイノシシを狩って食ったところでその思いが頭から消えなくなってしまう」

「じゃあさっき僕のこと知らないって言ったのは……」

「人の区別なんてできなくなってしまったのさ。お前たちが家畜を見分けることができないように。このままでは惨劇がまた起きる。だから早く俺を殺せ。理性が保てる間に」

僕は息をのむ。決意を決めるのに数秒とかからなかった。いや、すでに道はないのだ。ここで死ぬか、それともドラゴンとなるか。いや違う。ここで俺が殺さなければ、村人全員に危害が及ぶ。エリーも助けられない。足は震えていた。

「すまない」

ジャックが言う。僕は落ちた剣を拾う。

「僕は怨みますよ。いつまでも。そして、なってみますよ。死神と呼ばれない守り神に」

「ああ、願いますよ」

ジャックの返事とともに、僕は構えた剣をドラゴンにめがけて振り下ろした。

(後書き)

感想もらえたらものすごくうれしいです。批判でも結構……へこむけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1345t/>

ドラゴンのいる村

2011年10月8日23時14分発行